

七月一〇日(月)

お店の出入り口まで芽衣さんたちをお見送りしていた郁美さんが、席まで戻ってきた。

彼女はソファ席に腰を下ろすなり、アイスコーヒーをたっぷり吸い込んだ。

「芽衣さん、大丈夫そうでした？」

映美ちゃんを連れて駅前からバスで帰ると言っていたけど、間に合うのだろうか。

郁美さんは「大丈夫、大丈夫」と脇に避けたメニューを開きながら言う。

「アルプラザのところまでなら、割と何本も出てるみたいだし、間に合わなければ駅前で買物でもするそうぞうで」

そういわれると、私も駅前からバスに乗った時は、割と選択肢が多かった様な気がする。乗り場が分散していて、どこかの何分発に乗ればいいかはちよつと困ったけど。映美ちゃんはお利口さんだからいいけれど、小さなお嬢ちゃんを連れてのお出かけは大変だろうなと、遠い記憶を辿りながら、さっきまで目の前にいた二人に想いを馳せた。

「デザートとか、注文しません？」

郁美さんは、グラントメニューとは別に添えられた季節限定メニューを見ている。三角に立てられている小さいメニューにも、「メロン」の文言が踊っていても美味しそうに見える。

とはいえ、今し方ランチを食べたばかりで、あとはコーヒーぐらいしか入りそうにない。一口二口食べるぐらいならなんとでもなりそうだけど、隣や向かいのテーブルに運ばれてくるデザートを見る限り、食べ切るには少ししんどそうなサイズに思える。

「私はもうお腹いっぱいぞうで」

「じゃあ、味見だけしません？ 食べれるなら半分でもいいんですけど」

郁美さんは目を爛々と輝かせながら、私に同意を求めてきた。同意というよりは、背中を押して欲しそうにも見える。新メニューの開拓、インスピレーションを得るというのもありそうだし、仕事と思つて頷いておく。

彼女は躊躇なく呼び出しボタンを押し、メロンを半分使ったメニューを注文し

た。

「パフェは流石に厳しいし、シフォンケーキはなんとなく想像できるんですけど、こういう映えるメニューは、自分でも挑戦してみたいですよ」

彼女は心底楽しそうに、デザートが届くのを待っている。自分のアイスコーヒーを飲み切ると、私のカップも気にかけてくれた。

「そんな、自分で行きますから」

「私もついでなんで。座っててください」

郁美さんの言葉に甘えて、ホットコーヒーのお代わりを頼んでしまった。彼女は空のグラスとカップを両手に持ち、向こうのドリンクバーへ歩いて行った。彼女がおかわりを持って戻ってくる間に、デザートはまだ運ばれてこない。ランチには少し遅い時間帯だけでも、どうやら人手が足りないらしい。

「来週、本当に良かったんですか？」

郁美さんは「いいんです、いいんです」と手を振りながら言った。

「身内のことなんで、身内でやります」

「ルミの時は良くしていただいたのに」

「だって、娘さんじゃないですか。こっちは実の父親ですから、なんでもいいんですよ」

郁美さんは豪快に笑うと、ようやく運ばれてきたデザートに目を向ける。スマートフォンで角度を変えながら何枚か写真を撮り、肉眼でも矯めつ眇めつ眇めつスプーンを差し込んだ。ここから眺めていてもとてもみずみずしそうな果肉と、メロン独特の香りが鼻をくすぐる。コレは中々、美味しそうだ。お店の出入り口まで芽衣さんたちをお見送りしていた郁美さんが、席まで戻ってきた。

彼女はソファ席に腰を下ろすなり、アイスコーヒーをたっぷり吸い込んだ。

「芽衣さん、大丈夫そうでした？」

映美ちゃんを連れて駅前からバスで帰ると言ってたけど、間に合うのだろうか。郁美さんは「大丈夫、大丈夫」と脇に避けたメニューを開きながら言う。

「アルプラザのところまでなら、割と何本も出てるみたいだし、間に合わなければ駅前で買い物でもするそれで」

そういわれると、私も駅前からバスに乗った時は、割と選択肢が多かった様な気がする。乗り場が分散していて、どこの何分発に乗ればいいのかはちょっと困ったけど。映美ちゃんはお利口さんだからいいけれど、小さなお嬢ちゃんを連れてのお出かけは大変だろうと、遠い記憶を辿りながら、さつきまで目の前にいた

二人に想いを馳せた。

「デザートとか、注文しません？」

郁美さんは、グラนด์メニューとは別に添えられた季節限定メニューを見ている。三角に立てられている小さいメニューにも、「メロン」の文言が踊っついても美味しそうに見える。

とはいえ、今し方ランチを食べたばかりで、あとはコーヒーぐらいしか入りそうにない。一口二口食べるぐらいならなんとでもなりそうだけど、隣や向かいのテーブルに運ばれてくるデザートを見る限り、食べ切るには少ししんどそうなサイズに思える。

「私はもうお腹いっぱい」

「じゃあ、味見だけしません？ 食べれるなら半分でもいいんですけど」

郁美さんは目を爛々と輝かせながら、私に同意を求めてきた。同意というよりは、背中を押して欲しそうにも見える。新メニューの開拓、インスピレーションを得るというのもありそうだし、仕事と思っつて頷いておく。

彼女は躊躇なく呼び出しボタンを押し、メロンを半分使ったメニューを注文した。

「パフェは流石に厳しいし、シフォンケーキはなんとなく想像できるんですけど、こういう映えるメニューは、自分でも挑戦してみたいですね」

彼女は心底楽しそうに、デザートが届くのを待っている。自分のアイスコ

ヒーを飲み切ると、私のカップも気にかけてくれた。

「そんな、自分で行きますから」

「私もついなんです。座っててください」

郁美さんの言葉に甘えて、ホットコーヒーのお代わりを頼んでしまった。彼女は空のグラスとカップを両手に持ち、向こうのドリンクバーへ歩いて行った。彼女がおかわりを持って戻ってくる間に、デザートはまだ運ばれてこない。ランチには少し遅い時間帯だけれども、どうやら人手が足りないらしい。

「来週、本当に良かったんですか？」

郁美さんは「いいんです、いいんです」と手を振りながら言った。

「身内のことなんで、身内でやります」

「ルミの時は良くしていただいたのに」

「だって、娘さんじゃないですか。こっちは実の父親ですから、なんでもいいんですよ」

郁美さんは豪快に笑うと、ようやく運ばれてきたデザートに目を向ける。スマートフォンで角度を変えながら何枚か写真を撮り、肉眼でも矯めつ眇めつ眇めてスプーンを差し込んだ。ここから眺めていてもとてもみずみずしそうな果肉と、メロン独特の香りが鼻をくすぐる。コレは中々、美味しそうだ。

初出 令和三年七月一八日 MAGNET MACROLINKにて公開